

坂田寺跡出土の三彩

はじめに 明日香村坂田・祝戸に所在する坂田寺は鞍作氏の氏寺とされ、西面する奈良時代伽藍の様相があきらかになっている。1973・1992年度の調査等では多数の三彩が出土しているが（『藤原概報 5・21・22・23』）、詳細は未公表である。しかし、主要な資料については展覧会図録（五島美術館『日本の三彩と緑釉－天平に咲いた華－』1998）等で紹介され、一部の資料については、唐三彩や渤海三彩ではないかという議論を呼んでいた。一方、降幡順子が最近当該資料の化学分析を実施し、その生産地に関して興味深い結果が得られた（降幡順子ほか「飛鳥・藤原京跡出土鉛釉陶器に対する化学分析」『東洋陶磁』41、2012）。本稿ではこうした状況に鑑み、実測図と詳細を公表して今後の研究に資することとする。

遺物の概要（図100） 1は壺口縁部付近から肩部の破片で、口縁部は欠損する。葉壺形の短頸壺であろう。外面に緑釉上に白釉を点状に配し、内面は口縁部付近に緑釉を施す。2は陶枕。同范品とみられる群馬県多田山12号墳出土品によれば、8個の紡錘文による環を二重に配し、その外周を輪花で画する意匠の宝相華文となる。押圧した輪郭線の窪みには、赤褐色の粘土を入れている。外面のみに緑釉、白釉と褐釉を施す。一カ所の紡錘文端に小さなトチン目跡があり、この面は底面とみられる。1・2ともに白色の極めて精良な胎土で、化粧土は塗布せず、堅緻な焼成で釉の発色も鮮やかである。3・4は同一個体の可能性が高い壺破片で、3が肩部、4が下胴部となる。

胴部最大径約24cmに復元されている。外面の調整はロクロ削りと思われ、ともに2条一組の低く細い隆帯を削り出す。内面の調整はロクロナデによる。白色の精良な胎土で、化粧土は施さず、やや軟質に焼きあがる。外面は白釉をベースに薄緑釉、濃緑釉、褐釉を大きめに点彩し、釉は流下がみられる。内面は薄緑釉を基調にし、部分的に濃緑釉を配する。5は丸みを帯びた口縁部の破片で、器形は盤になると思われる。同一個体の破片が2点ある。褐釉と緑釉が認められ、下の破片には塗り残し部がある。口径は35cm程度か。口縁部上端を幅狭くロクロ削りで調整する。6は5と同一個体と思われる底部破片。底部外周に1条の細い沈線を巡らせる。調整は施釉のために不明。内外面ともに淡緑釉上に白釉、褐釉、濃緑釉を点彩する。釉層は厚く、特に褐釉と濃緑釉は盛り上がり、全体的にガラス化している。傾けて焼成したため、内面の釉は流れている。残存部にはトチンの目跡はみられない。底径は30cm程度に復元できる。5・6ともに白色の精良な胎土で、化粧土は施さない。7は炉か火舎に付く獣脚。おそらく左右合範による成形で、合わせ目はナデで調整する。灰白色の胎土で、全面に褐釉を施す。

出土三彩の位置づけ 1・2は唐三彩と認められ、胎土や釉調から河南鞏義窯産の可能性もある。他は唐以外の製品とみられ、3～7は渤海産とされているが（植崎彰一「日本出土の唐三彩とその性格」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』8、2000）、降幡の分析では国産の可能性も示された。3・4の細い削り出し隆帯は奈良三彩にはあまりみない技法であるが、唐三彩にも類例が乏しく、その位置づけはさらに検討の必要がある。（玉田芳英）

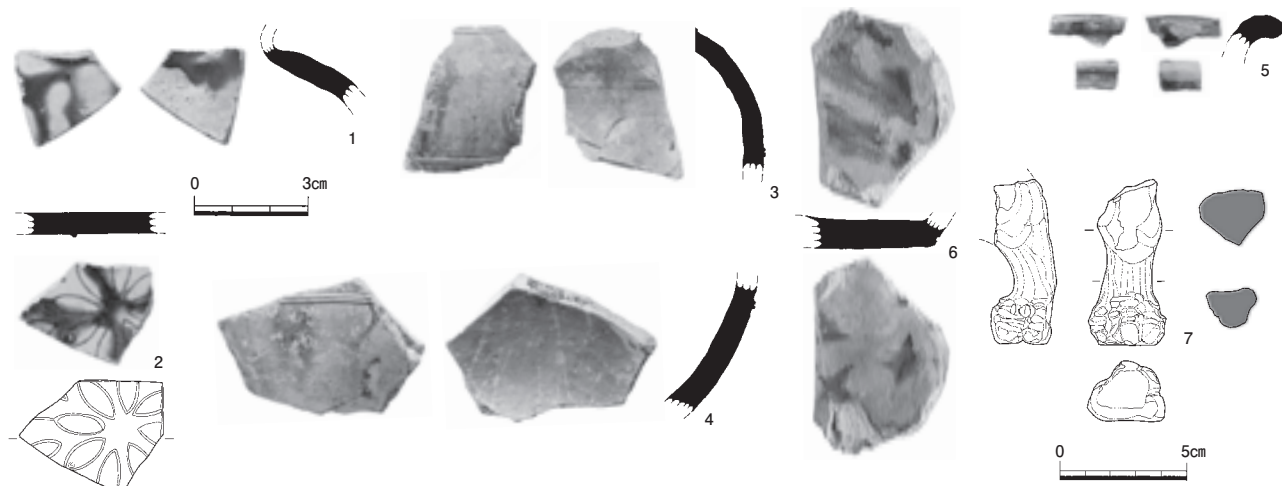


図100 坂田寺跡出土三彩 1：2（1・2）、1：3（3～7）